

シャボン玉の歴史は石けんの歴史

日本は水に恵まれているため、石けんを使う風習はとても遅かったのです。

日本に初めて石けんが渡来したのは、1542年(天文11年)室町時代末期だったそうで、1596年(慶応元年)「石田三成」が博多の豪商「神谷宗湛」に対し「志やぼん」2個を大変満足して受け取ったという礼状を書いたと記録が残っているようです。

江戸時代でも石けんは非常に高価なものだったようで、庶民は「トチの実」や「ムクロジュ」(羽根つきの羽根の先端に付いている黒い実)でシャボン玉を作っていました。

渡来したということは、石けんが最初に作られたのはいつごろでしょう？

実は諸説あり、ローマ王朝が最初ともいわれていますが、古代バビロニア(現在のイラク)で紀元前3000年頃に「儀式」で使用した動物の肉から出る脂肪と燃料に使用した植物の灰汁が脂肪酸となり思わぬ副産物として石けんができたとされています。粘土板の発掘によりインドでも作られていたようですが、それぞれが伝わったかどうかは定かではありません。

石けんは5000年も前からこの地球上にあったというわけです。

現在に様な工業化の始まりは、いつ頃だったのでしょうか？

8世紀にエスパニア(現在のスペイン)やイタリアなどで動物性脂肪と木灰から作った「軟石けん」というとても臭いもので始まりました。

12世紀になると地中海沿岸のオリーブオイルと海藻灰を原料とした不快な臭いもなく扱いやすい「硬石けん」がヨーロッパで人気を博しました。

フランスのマルセイユやベネチア、イタリアのサボナで盛んに作られ、このサボナがフランス語の「SAVON」(サボン)が語源ともいわれています。

日本では、1873年(明治6年)に「堤磯右衛門」が横浜に工場を建て、牛の脂肪と茄子の灰汁で作った洗濯石けん1個10銭で発売したことに始まり、翌年には化粧石けんも発売しました。

シャボン玉アーティスト すぎやまこうじ